Title	李立三コースとロシア留學生派
Sub Title	The Li Li-san line and the “retuned students”
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1956
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.29, No.5 (1956. 5) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19560515-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

李立三コースとロシア留學生派

石川忠雄

目次

- 一 序言
- 二 李立三コースの特質と革命發展の不均等性
- 三 ロシア留學生派の立場と李立三コース
- 四 結言

一

一九三〇年七月、彭德懷の紅軍第五軍によつておこなわれた長沙占領の失敗は、それまで實際に黨の指導權を握つていた李立三に對して、共產黨内に有力な反對運動を展開させる直接の契機となつた。周知のように、この反李立三運動の中心勢力は、コミンテルン代表ミフを背景とする陳紹禹・秦邦憲・張聞天・王稼齋・何子述などのロシア留學生派であつたが、かれらは、長沙ソヴェトの失敗が、その基礎となつた一九三〇年六月十一日の黨中央政治局決議——「あらたな革命の高潮と一省または數省の首先勝利」——に示された李立三の基本的な革命認識とその指導の誤りによるものであるとして、はげ

しく李立三を攻撃し、黨内の對立はここに表面化するにいたつたのである。李立三に對して批判的立場にあつたミフをつうじてこの情勢を理解していたコミンテルンは、駐ソ代表瞿秋白に對して、三中全會を開いて李立三の革命コースを批判すべきことを命じ、折柄情勢報告のためモスコイに来ていた周恩來とともにかれを歸國させた。その結果、三中全會は、九月下旬、廬山に開かれたのであるが、この會議は、一貫して、李立三コースの一部の誤謬を認めながらも、全體としてはそれを擁護する立場をとり、三中全會決議——「政治情勢と黨の總任務に關する決議」——においては、中央政治局が「帝國主義、反革命支配階級の形勢と可能性に對し、革命勢力の現状と革命形勢の發展の速度とに對し、すべて過大な評價をなしている」ことを誤謬として指摘しながら、しかもその反面、「中央政治局の方針は正確であり、コミンテルンの方針に一致している」と主張して、反李立三派の反對論をしりぞけてしまつたのである。

この結果は、コミンテルン代表ミフの反李立三態度を著しく硬化させた。コミンテルンは十一月十六日、中國共產黨に對して書翰を送り、李立三コースは非マルクス・レーニン主義に立脚するものであり、その誤謬は單なる偶然的個別的なものではなく、中國革命發展の特殊性に對する無理解にもとづくものであるとして、李立三の革命指導を徹底的に攻撃し、その指導的地位からの退却を要求したのである。かくて、黨内の主導権は、ようやく反李立三派の掌握するところとなり、十一月二十五日の中央政治局會議においては李立三の辭職も實現され、李立三コース清算の運動は強力におしすすめられていたのであるが、李立三派の有力黨員のなかには、依然として調和的態度をとるものが少くなかつたので、反李立三派は四中全會を開いて徹底的に李立三コースを破棄すべきことを中央政治局に要求した。その結果、四中全會は、翌一九三一年一月八日上海に開會され、李立三コースの完全な克服を強調する決議を採擇したのである。

かくて、李立三派の勢力は黨中央から退却し、これにかわつて陳紹禹・秦邦憲・沈澤民等ロシア留學生派の進出をみるこゝとなつたのであるが、かれらは、一九三一年二月、このころようやくロシア留學生派に對立するようになつた羅章龍・何

孟雄等労働運動幹部を中心とするいわゆる調和派七名の除名を断行し、さらに六月、黨總書記向忠發が逮捕銃殺されるに及んで、總書記陳紹禹・組織部長張聞天・軍事部長周恩來・宣傳部長沈澤民・婦人部長孟慶樹（陳紹禹夫人）・政治局書記秦邦憲等の新中央を形成し⁽³⁾、完全に黨の指導權を掌握したのである。新中央は、その後もひきつづき上海にあつて活動を繼續したが、國民黨のはげしい彈壓をうけたため都市において革命運動を行うことができなくなり、やむなく一九三三年江西ソヴェト區にひき揚げるにいたつた⁽⁴⁾。かくてかれらは、ソヴェト區においても、「同志毛澤東の指導、とくに同志毛澤東の赤軍に對する指導を排除し⁽⁵⁾」、ソヴェト運動の發展に重大な影響をあたえたのである。黨總書記としての陳紹禹の地位は、一九三三年（一説には一九三二年秋）秦邦憲に、さらに一九三四年一月張聞天にとつてかわられたといわれているが、いづれにしても、一九三五年一月、毛澤東がいわゆる遵義會議においてその指導權を確立するまで、黨權は正式にはロシア留學生派の手に握られていたのである。

以上が李立三コースの失敗からロシア留學生派の時代にいたるまでの經過の概要であるが、この時期は、中國共產黨史において、それまで革命運動の重點を都市労働運動においていたいわゆる黨主流派が、中國革命の發展の現實のまゝに次第にその勢力を失い、農村工作重點主義にたつ毛澤東的革命コースが、ソヴェト運動の成功にともなつて、その傍流的存在から主流的地位へ發展していく、いわば轉換期ともいふべき時期であつた。したがつて、ロシア留學生派は、毛澤東派に對する黨主流派の最後の時期に屬するものといふことができるのであつて、この時期における中國共產黨の活動は、この二つの革命コースの交錯のうえになりたつていたともいふるのである。しかも、前述したように、一九三三年ロシア留學生派の支配する黨中央が江西ソヴェト區にひき揚げてから、かれらは毛澤東の指導するソヴェト運動のものにも強い影響をあたえたのである。したがつて、ロシア留學生派の革命コースの基本的立場を明らかにすることは、當時における中國共產黨の革命運動の性格を理解するうえに、重要な意義をもつといわなければならないのである。

しかるにこれまでの中國共產黨史の研究においては、多くの場合、この問題について、ロシア留學生派が李立三コースを否定することによつて、黨内の指導權を掌握したことを簡單に指摘するだけで、ロシア留學生派の革命コースの基本的性格及びそれと李立三コースとの關係についての理論的研究は、ほとんどおこなわれていなかつたように思われる。しかしこのことは、もちろん、從來の黨史研究で、敍上の問題に言及したものが全くなかつたことを意味するものではない。これらのわずかな研究のなかで、とくに注目されなければならないのは、たとえばベンジャミン・シュワーツ氏が、「わたくしは、一般に、この派（ロシア留學生派のこと…筆者）の反對がイデオロギー的な面に根ざしていたものではないと考える方が安全であると思う」と述べているように、李立三派とロシア留學生派との對立を、革命理論における對立というよりはむしろ、一種の權力鬭争とみる見方が存在しているといふことである。この見解は、兩派の對立の基本的原因を權力獲得への要求にもとめ、原則的には、その革命理論について兩派の間に本質的な相違は存在しない、という立場をとつていのである。

いずれにしても、このような事實から明らかのように、ロシア留學生派の革命コースの基本的性格を究明するにあつては、李立三コースとの關係においてこれを検討することが有意義であるように考えられる。なぜならば、そうすることによつて、ロシア留學生派の革命コースの内容を明らかにし、中國共產黨史におけるその正しい位置づけを行いうるばかりでなく、李立三派とロシア留學生派との對立の眞の意味を理解する手がかりをつかむことができるからである。しかし、周知のように、この課題を詳細に研究するための資料は、現在のところ決して十分であるとはいへない。とくにそれは、ロシア留學生派の場合についてはなほだしい。本稿は、筆者の利用しうる乏しい資料によつて、李立三コースとロシア留學生派の革命コースとの理論的關係を究明し、後者の革命コースの基本的性格を明らかにしようとする一つの試みにほかならない。

(1) ミフと陳紹禹以下ロシア留學生派との關係については、波多野乾一「現代支那の政治と人物」三五九—六一頁参照。

(2) 三中全會決議については、波多野乾一「支那共產黨史」五一—四頁以下参照。

(3) 日本外事協會編「支那に於ける共產運動」一五八頁。

(4) 黨中央が江西ソウエト區にひき揚げた時期については、一九三二年秋説と一九三三年説との二つがある。たとえば Robert C. North, *Kuomintang and Chinese Communist Elites, 1932*, p. 36 は前者を、胡喬木「中國共產黨的三十年」三五頁は後者の説をとっている。

(5) 胡喬木前掲三五頁。

(6) North, *op. cit.*, pp. 36-7.

(7) Benjamin I. Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao, 1951*, p. 150.

(8) この點について、たとえば波多野乾一氏は、「李立三、ミン兩派の争いは、結局労働者出身の首領に對するインテリの反抗」であると述べ(波多野乾一「赤色支那の究明」五五頁)、大塚令三氏は、「黨内に於ける鬭争、政治理論の鬭争は、畢竟するに黨權掌握の鬭争に歸着する。ミンが領導する露西亞留學生のグループは、一般インテリゲンチヤと等しく極度の進出欲と權勢慾とを多分に有つものであり、プロレタリア出身の李立三派を打倒してこれに代らんことを企圖し、毎にその機會を覗つて居たのである」と述べている(大塚令三「支那共產黨史」上巻一一六頁)。

二

李立三コースとの關係において、ロシア留學生派の革命コースを検討するためには、まず順序として、李立三コースの基本的特徴が明らかにされなければならない。李立三コースの内容をもつとも正確に且つ集中的に表現したものは、前述した一九三〇年六月十一日の中央政治局決議であるが、これについては以前にも詳細に紹介したことがあるので、本稿では、必要とする限度において、李立三コースの特徴を指摘することにとどめたい。

六月十一日決議は、だいたいつぎの四つの部分からなりたつておるといつて差支えないように思われる。すなわち、

(一) 世界革命情勢の昂揚と中國革命の地位　この決議はまず、世界の革命情勢が、世界資本主義の一般的危機の第三期を基礎として、全世界的規模において成熟していることを指摘したのち、中國は「帝國主義の一切の根本的矛盾がもつとも

尖鋭的に集中している地點」であるから、革命情勢の世界的規模における一律的發展とともに急速に革命化し、その爆發によつて革命を全世界に波及させることができるばかりでなく、さらにそのような世界革命の發展によつて究極的な中國革命の勝利もはじめて可能となる旨を主張している。

(二) 中國における革命情勢の昂揚 ついで決議は、このような根本的危機にたつ帝國主義諸國の影響をうけて、中國の政治經濟情勢が極度に悪化し、大衆の革命闘争は飛躍的に發展し、「産業區域や政治中心地帯から一個の偉大なプロレタリア闘争が爆發するならば、それは確實にただちに革命高潮——直接革命の情勢を形成しうる」ような状態にあることを明らかにしている。したがつて、このような全國的な革命情勢の高潮のもとにおいて、革命が一省または數省の重要省區で首先勝利を獲得すれば、それは必ず全國に波及し、全國的革命政權の樹立を可能にし、世界革命への原動力となりうるのであつて、一省または數省における首先勝利の獲得は刻下の急務といわなければならない。しからば、それは、いかにして可能であらうか。

(三) 都市労働運動の重視と紅軍の任務 決議は、一省または數省の首先勝利を決定するものが、「プロレタリア階級の偉大な闘争であり……プロレタリア階級の罷業の高潮がなく中心都市の武装暴動がなくては、一省或は數省の首先勝利は決してありえない」ことを指摘しながら、他方これに農民の暴動・兵士の暴動とくに紅軍の主要都市に對する強力な攻撃が配合されなければならないことを主張している。すなわち、決議は、都市労働運動が中國革命の勝利を決定する基本力量であるとしているのであるが、それと同時に、紅軍もまた、都市における武装暴動を成功にみちびき、中心都市の奪取に重要な役割を果すものと考えているのである。

(四) 革命の轉換に關する急進的の見解 このようにして、一省または數省の首先勝利が實現したとき、ブルジョア階級がすでに反革命陣營に移行している中國の革命は、「帝國主義者・買辦・地主階級に對する戦争であると同時に反ブルジョア

階級戦争」にならざるをえず、政治的にみて、「この強大な反革命的攻撃に對抗するためには、必然的に中央集権的獨裁の政權を必要とする」のであつて、これはとりもなおさず「勞農獨裁からプロレタリア獨裁に進む」ことであり、このような「革命の成功の開始、革命的支配の創造の開始は、間隔なしにブルジョア民主主義革命のプロレタリア革命への即時の轉化の開始である」と述べているのである。

以上が六月十一日決議の要旨であるが、これをつうじてもつとも注意されなければならないのは、(一)及び(二)にみられるように、革命情勢が、世界的にも中國的にも、基本的には一律に全體的規模において成熟しており、局地的な革命の爆發は直ちに全體的決戦にみちびかれ、またその勝利が局地的な革命の成功を究極的に保證する、という考え方をしていることである。この見解は、明らかに、レーニン主義の精髓である帝國主義段階における革命發展の不均等性の理論と、根本的に相反するものといわなければならない。なぜならば、帝國主義段階における革命運動の基本的特質として、その發展が不均等に行われるかぎり、革命はただ直線的に上昇するだけの運動であり、全體的規模において一律に成熟し、直ちに全體的決戦に發展するというようなことはありえないからである。したがつて、(一)及び(二)の問題は、このような「革命發展の不均等性に對する認識の缺除」からうまれたものといつても差支えないのである。しかし、この不均等性の無視は、(一)及び(二)の問題だけにかぎられるわけではなく、(三)及び(四)の見解もこれと極めて密接な關係をもつているのである。その理由については、筆者は別稿において詳細に論じたことがあるので、ここでそれを繰返す必要はない。ただこの事實を指摘しておけばそれで十分である。

これらの事實から知られるように、六月十一日決議にみいだされる李立三コースの基本的特徴が、革命運動發展の不均等性に對する正確な認識の缺除にあることは明らかである。したがつて、李立三コースを批判したコミンテルン書翰(一九三一年十一月十六日着)が、「李立三はあらゆるマルクス主義者・レーニン主義者にとつて義務的な、客觀的情勢の分析から、闘争

する力の相互關係の分析から出發せず……反マルクス主義的、反レーニン主義的立場を作り出した……李立三は、支那に於ける今日の革命的昂揚の最も重要な特殊性の一つ、即ち國內に於ける革命運動の發展の不均衡を考慮しなかつた」と述べているのは、マルクス・レーニン主義の立場にたつきり、たしかに正しい批判であるといわなければならぬのである。

このような李立三コースの本質的特徴は、當然中國革命の基本戦略、すなわち革命工作の重點を都市と農村のいずれにおくかという革命運動の基本問題にも、重大な關係をもたざるをえない。いつたい、中國における革命運動發展の不均等性は、帝國主義を含む反革命勢力が極めて強大であり、それは都市を中心に鞏固な支配を確立していること・中國經濟の發展が不均等であり農村は都市に依存していないこと・中國の土地は廣大であり農民は強い革命性を有していること・中國の反革命陣營内部に不統一と各種の矛盾が存在すること・農民の鬭争が中國共產黨の指導下にあること——などの諸條件を基礎として生れたものであり、このような條件のもとにおいては、中國の革命運動は長期且つ困難なものとならざるをえず、その發展も不均等におこなわれざるをえないとされているのである。いいかえれば、中國の革命運動は、その長期性ととも、地域的に不均等に發展するばかりでなく、農民運動が著しく發展する可能性をもち、反革命勢力の強大な都市労働運動が容易に發展しえないという特殊な性格をもつていたのである。したがつて、このような中國革命發展の特殊性を正しく認識するかぎり、共產黨がその革命工作の重點を「敵の力量の比較的強大な都市から敵の力量の比較的弱い農村にうつす」ことは當然であり、ここにいわゆる農村工作重点主義が、いいかえれば農民を指導して土地革命と遊撃戦争を行い、革命根據地を建設し、紅軍を強化し、武装した革命的農村をもつて都市を包圍し、最後に都市を奪取する革命方式が、革命發展の不均等性に對する正確な認識の必然的結果として、とりあげられることとなるのである。

したがつて、革命工作の重點を都市におく都市工作重点主義を採用することは、明らかに中國革命發展の不均等性に對する正確な認識が缺除していることを示すものであり、この二者は不可分の關係において結びついているのである。このこと

は、李立三コースの場合においても、明白にうかがわれる。たとえば、李立三がすでにその指導権を掌握していた一九二八年十一月の黨中央通告は、「大衆中におけるわれわれの活動の主要な對象は、都市における廣汎な大衆、とくに産業労働者でなければならぬ。労働者の指導なくして農村における勝利の見込はほとんど存在しない……農村における活動は無視されてはならない。しかし比較していえば、都市における活動がより以上に強調されなければならないのである⁽⁸⁾」と主張し、さらにまた一九二九年六月から七月にかけて開會された二中全會決議は、「若しも黨が労働者階級中に鞏固な基礎を有せず、各企業及び組合運動中に廣汎な労働者組織の基礎を有しないならば、黨は革命に際して指導的地位を握り得ないのである。故に組合運動、特に鐵道海員礦山等の重要産業労働者中に於ける運動を強化することは、黨の當面最主要的任務である⁽⁹⁾」と述べ、黨活動の重點が都市工作にむけられなければならないことを主張しているのである。ここに見出される都市工作重點主義は、いうまでもなく李立三が、中國革命發展の不均等性について、正しい認識をもつていなかったことから生れたものにほかならないのである。

このように、李立三コースの基本的特徴が革命發展の不均等性に對する正確な認識の缺除にあり、それが都市工作重點主義と不可分の關係にあるとすれば、ロシア留學生派が、中國革命の基本戰略について、都市工作重點主義と農村工作重點主義のいずれをとつているかを検討することは、かれらの革命コースの基本的性格を、またそれと李立三コースとの關係を明らかにする重要な手がかりになるといわなければならない。そこで、つぎに、この點を中心として、ロシア留學生派の立場を究明することとしよう。

(1) 「法學研究」第二十六卷第七號拙稿「李立三コース問題の一考察」八一—一〇頁。

(2) 六月十一日中央政治局決議については、波多野乾一「支那共產黨史」四九〇頁以下及び Conrad Brandt, Benjamin Schwartz and John K. Fairbank, A Documentary History of Chinese Communism, 1952, pp. 184-200 參照。

(3) 「法學研究」前掲拙稿一一頁以下。

- (4) 外務省調査部「植民地民族革命に於けるコミンテルンの戦略及び戦術」三一六—七頁。
- (5) 中共中央毛澤東選集出版委員會「毛澤東選集」第二卷(平装本)「中國革命和中國共產黨」六二七—三〇頁。
- (6) 胡喬木「中國共產黨的三十年」二七頁。
- (7) 毛澤東の農村工作重點主義に對して、從來の黨主流がなぜ都市工作重點主義を採用していたか、その根據については、たとえば、「*ソシア研究*」第一卷第三號拙稿「武漢政府時代における中國共產黨について」三四—五頁參照。
- (8) Benjamin I. Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao, 1961*, pp. 128-9.
- (9) 波多野前掲三三〇頁。

三

ロシア留學生派の革命コースの内容を理解するためには、まず六月十一日の中央政治局決議以前におけるその基本的立場が検討されなければならない。なぜならば、そうすることによつてはじめて、李立三コースに對して批判的立場をとつたこれらの見解を正しく把握することができるからである。周知のように、一般に、ロシア留學生派の基本的立場を明らかにした資料は極めて少いのであるが、とくに、六月十一日決議以前のものはほとんど存在しないといつても過言ではない。筆者の知るかぎりでは、わずかにロシア留學生派の指導者王明(陳紹禹)の「武装暴動」(一九二九年上海で刊行)という小冊子があるにすぎないように思われる。しかし筆者は、こんにちまでこの書物入手することができなかつたので、ひとまずベンジヤミン・シュワーツ氏によつて、本書の要點を紹介することとした。

すなわち、それによると、陳紹禹は、中國革命における「都市プロレタリアートと農村パルチザン運動との關係」について、「パルチザン戦争は、工業的基礎をもつた武装蜂起と結びつけられなければならない……われわれは、この型の戦い(ゲリラ戦)を階級闘争の最高の形態——プロレタリアートの武装蜂起と密接に結びつけなければならない」と主張し、さらにつづいて、

「大衆を武装するというわれわれの任務を實行するにあつて、われわれは、産業都市のプロレタリアートに最大の注意をほらい、プロレタリアートの武装蜂起を農村のバルチザン戦争の單なる反映にすぎないとか、單なる補足手段にすぎないとか、絶對に考へてはならない。革命の組織的中心を形成しうるのは工業都市だけであり、われわれの蜂起において指導的力量となりうるのはプロレタリアートだけであるということ、認識することができないものはすべて、マルキシズムの暴動の戰略をまつたく理解していかないものである」と述べ、紅軍の果すべき役割についても、「その主要な任務の一つは都市を占領し、都市の革命勢力と結合することである」と主張していた、とされている。またかれは、これ以外にも、李立三コース問題の起る直前の一九三〇年五月、黨の機關誌「布爾塞維克」に「目前軍閥戦争與黨的任務」と題する一論文を發表し、「ソヴェト政府の樹立は、疑いもなく武漢の占領をもつてははじめられなければならない」ことを明らかにしたといわれている。

もしこの敘述が正確であるとするならば、陳紹禹が、したがつてロシア留學生派が、六月十一日決議以前において、少くとも都市工作重點主義の立場をとつていたことは否定しえない事實であり、その基本的立場は、「李立三の行動を指導した鼠解と、あつたにしてもほとんど相違するところがない」といわなければならないのである。このことは、前述したように、紅軍に課せられた任務及び中心都市の即時占領を目指していたことなどからも明白に窺われるのである。

しからば、六月十一日決議以後におけるロシア留學生派の立場は、どのようなものであろうか。

周知のように、ロシア留學生派の立場から李立三コースを徹底的に批判したもつとも重要な文献は、一九三一年一月の四中全會決議である。したがつて、この決議に示された新しい革命方針は、ロシア留學生派が李立三コースの批判のうえに採擇したかれらの革命コースの特徴を示すものであり、これを検討することによつて、ロシア留學生派の立場も一應明らかになつてくるといなければならぬのである。決議は、まず、李立三コースに關連して、「我我が、些かも鞏固なる後防を有たず、何等必要なる準備作業を進行せしめてゐない時に當り、また我が充分なる力と大衆的支持を持たぬ時期に於て、

過早なる冒險的指令を固執して大都市を奪取した。長沙の失敗も、すべてかかる錯誤に因るものである……李立三の指導は、完全に、鞏固なるソヴェエト根據地を建立すべき緊急任務を輕視し、強力なるソヴェエト政權樹立の任務を閑却し、且つ遊撃戰爭を取消す指令を發し、これらは既に過去の段階のものであることを承認してゐる。斯くして反革命軍閥がソヴェエト區域を攻撃しつつある條件の下に於て、我等の陣營は著しく薄弱となつた。これらの一切は、亦赤衛軍が今重大なる失敗を蒙りつつある、主要なる原因である」と述べ、李立三コースの性格を明らかにするとともに、このような李立三コースの誤謬は、「個別的、偶然的な錯誤ではなく、最も基礎的な誤れる多くの見解に出發した體系を有つ、一貫せる反レーニン主義の系統であり……李立三の方針は革命昂揚の一般的基础の上に立つて世界革命發展の不平衡を否認した」ものであり、「中國國內の革命發展の不平衡を否認し、中國の政治的——經濟的特殊性を理解し得なかつた」ものであると斷定し、李立三コースの誤謬の基本的原因をここに求めているのである。このように、四中全會決議は、李立三コースの誤謬の基本的原因が、革命發展の不均等性に對する無理解にあることを指摘しているのであるが、それならば、ロシア留學生派は、この決議において、革命發展の不均等性に對する正確な徹底した認識から當然に生ずべき農村工作重點主義の立場をとつていたのであらうか。これがつきに問われなければならない問題である。

この問題について、まず注目しなければならないのは、決議が、「理論上及び實際上に於て、完全に李立三の方針及び李立三の方針に對する調和的態度を克服する四中全會は、この任務を執行するためには、必ず實踐上に於てコミンテルンの一切の指示を執行」しなければならない旨を指示していることである。ここにいうコミンテルンの指示とは、いうまでもなく一九三〇年十一月十六日のコミンテルン書翰に示されたものを指すのであつて、それは中國共產黨に對して、「(一)眞正の勞農紅軍の即時結成、(二)共產主義者が多數を占め、最も優秀な非黨員労働者、農民及び紅軍兵士を吸引した鞏固な活動能力を有するソヴェエト政府の即時建設、(三)ソヴェエト區においてはボルシェヴィズムのもとに大衆を組織し、非ソヴェエト區におい

ては經濟的及び政治的大衆闘争を展開し、このような闘争の展開過程において大衆を組織すること」を要求していたのである。したがつて、四中全會決議は、これらの要求を實行することを指示したものとわなければならないのであるが、その内容からも知られるように、この決議が、ソヴェトの建設を中心とする農村工作に從來より以上の注意をはらつていことは明らかである。それはまた、前述したこの決議の李立三コース批判の内容からも知られるのである。しかし、このことは、ロシア留學生派がこのときになつて都市工作重點主義を放棄し、農村工作重點主義を採用したことを意味するものとは思われない。なぜならば、決議は、共産黨の主要任務として、「すでに破損せる黨及び青年團の組織を恢復し、大衆團體の工作を改善するには、先ず第一に、労働組合特に工場中の工作に注意し、支部の行動を鞏固にし、且有力にすべきである。……新しい幹部の引入れは先ず第一に労働者の積極的分子を以てし」なければならぬことを強調しているからである。周知のように、マルクス・レーニン主義によれば、中國共産黨は、中國革命を究極的に指導する唯一の革命組織であり、農業革命を含めて中國革命を勝利にみちびく不可欠の基礎的存在である。したがつて、共産黨の強化發展は、中國革命の發展に第一義的重要性をもつものといわなければならないのである。四中全會決議が、このような共産黨組織の回復の基礎を決定的に都市労働運動にもとめていることは、革命の勝利の前提をプロレタリアートのヘゲモニーにもとめ、都市労働運動こそプロレタリアートのヘゲモニーを保證するものであるとして、農民運動の重要性を認めながらも、都市労働運動の發展に革命工作の重點をおいていたこれまでの黨主流の見解が依然として存在していることを示しているように思われるのである。したがつて、この決議にみいだされる農村工作の重視は、農村工作重點主義を採用したことを意味するものではなく、都市工作重點主義はなお放棄されてはいなかったといわなければならないのである。それはまさに、ベンジャミン・シュワーツ氏のいうように、「要するに、ロシア留學生派は、農民への集中・農村根據地の建設・まつたく軍事的な目的と宣傳及び教育のために用いられる農民に基礎をおいた共産軍の建設、という毛澤東戰略の長期的な効果には信頼をおいていなかった」のである。

かくて、ロシア留學生派が、依然として都市工作重點主義の立場をとつていたことは明らかである。このことは、前述したように、かれらが中國革命のもつとも基本的な問題である革命發展の不均等性に對して正しい徹底した認識をもつていなかったことを示すものであるといわなければならない。したがつて、ロシア留學生派の革命コースは、六月十一日決議の後をつうじて、一貫した同一の内容をもつものであり、四中全會決議に、「我我が充分なる力と大衆的支持を持たぬ時期に於て、過早なる冒險的指令を固執して大都市を奪取した」とあることから明らかなように、革命情勢の發展の實態に對する評價においては、李立三と相違するにしても、革命コースの基本的立場においては、重大な相違は存在しなかつたといわなければならないように考えられるのである。

中國共產黨第六期七中全會通過（一九四五年四月二十日）の「關於若干歷史問題的決議」は、この問題に關連して、「當時發表された同志陳紹禹の『二つのコース』すなわち『中共をさらにボルシェヴィキ化するための闘争』という小冊子のなかで、實際に、李立三コース及びその他の左傾思想・左傾政策を、新しい形態のもとで繼續し、復活させ、あるいは發展させようとする新しい政治綱領が提起されたのである」と述べ、一九三一年一月から三五年一月にいたるロシア留學生派の革命コースの具體的發展過程を詳細に分析しているが、これらの事實は、いづれも、ロシア留學生派の立場が、本質的には李立三コースと大差ないものであることを示しているように思われるのである。

(1) Benjamin I. Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao*, 1951, pp. 149-50.

(2) *Ibid.*, p. 150.

(3) 四中全會決議については、波多野乾一「支那共產黨史」五五二頁以下参照。

(4) 外務省調査部「植民地民族革命に於けるコミンテルンの戰略及び戰術」三二二—三三頁及び波多野前掲五四三—四四頁。

(5) Benjamin I. Schwartz, "On the Originality of Mao Tse-tung, *Foreign Affairs*, Vol. 34, No. 1, Oct. 1955, p. 70.

(6) 中共中央毛澤東選集出版委員會「毛澤東選集」第三卷（平裝本）「關於若干歷史問題的決議」九八五頁。

四

以上において筆者は、革命戦略における李立三コースの特質が、いわゆる都市工作重點主義にあり、それは、中國革命發展の特殊性とくにその不均等性に對する無理解に深い關係をもつものであることを明らかにするとともに、ロシア留學生派の立場も、基本的には李立三コースとほとんど相違するところがないことを指摘した。したがつて、本質的な革命理論に屬するかぎり、李立三派とロシア留學生派との間には、兩者を決定的な對立にみちびくべき基本的な原因は存在しないといわなければならない。もつとも、前述したように、革命情勢の發展の實態について、兩者の間には評價の相違が存在しているけれども、このことは、兩派の革命理論の本質的同一性を否定するものではないのである。もしこのように理解することが正しいとすれば、この時期における李立三派とロシア留學生派との對立は、どのように考えられるべきであろうか。もちろんこの問題については、なお検討されなければならない點も少くないであろう。しかし、筆者が本稿の序論において言及したいいわゆる權力闘争説に、敘上の意味において、一つの有力な根據があることは否定しえないように思われるのである。